

改めてガン治療を考える

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

1, 緒言

ガン治療は依然として困難を極めている。それゆえ集学的な知識と統合的な医療体制が望ましい。特に人体を天地自然の中における存在と見なす東洋医学の考えは、個々の臓器・器官を重視し対処する西洋医学の技術・理論と結合することで一層価値が高まる。

当院のガン治療における基本姿勢は、「漢方薬でガンを治す」である。そこで当院に於ける集学的治療の実際を、生活指導面を含め、特に「治療の順序」と「薬量の問題」の二点に絞って発表する。

2, 方策

基本的に悪性腫瘍の多くは生活習慣の誤りに起因する疾病である。当院の外来を受診したガン患者に対しては、まず生活習慣の誤りを具体的に指摘し、日常生活の改善を求めると同時に、煎じ薬と散薬(動物炭薬を含む)の服用、軟膏(動物・鉱物薬を主とす)の経穴への頻回塗布を、患者自身の自己努力により行うよう指示する。

悪性腫瘍の患者は、肉腫や白血病・悪性リンパ腫なども含まれるが、主として上皮性ガンである。女性は乳ガン、男性は肺ガンと大腸ガンが最多であるが、症例は多岐にわたる。

当院の基本方針は、固形腫瘍に対しては原発巣の外科的切除を優先し、億・兆単位のガン細胞数を一気に減量することを第一とする。仮に遠隔転移を認め西洋医学で外科的治療の適応外と見なされる場合も、可及的に原発巣の切除を求める。その際いわゆる拡大全摘は術後の機能不全など患者への負担が大きく、実際には遠隔部への拡散が示唆されることもあり、腫瘍核出術で十分と考える。局所において浸潤性に拡大しているガン細胞は、遠隔部に拡散している可能性が高い細胞と共に、漢方薬により個体の免疫力を向上させることで対処可能と考えている。

そのためには生活習慣の改善が必須である。努力目標は冷飲食の禁止と上手な気晴らしに尽きる。温熱療法が有効であることから知られるように、ガン細胞は熱に弱い。今から三〇年前、国立のガン専門病院で研修時代に、ガン患者を高血糖負荷にすると四〇度以上の高熱を発することを応用して、新しいガン治療を試みたことがあった。高熱状態で少量の抗ガン剤や放射線を併用すると、ガンは見事に縮小した。高血糖負荷による副作用の問題があり、この治療法は断念されたのだが、ガンが熱に弱いという事実は大きな経験として残った。このことと、ガンは一般に夜間に増殖するという実験データを勘案すれば、夜間＝太陽がない＝冷えを起しやすいという図式のもとに、冷えがガン細胞増殖に大きな関わりを持つという図式が成り立つ。ここから就寝時に五本指の靴下をはいて寝ることの重要性が出てくる。また冷えは気・血・津液の停滞を生むので、この停滞が直接的なガン増殖に問題となるという認識が生まれる。

次に問題とすべきは、薬量の重要性についてである。特にガンを漢方薬で治したいとい

う意志の下には、それなりの薬量は必須となり、時には多量の生薬を用いる必要があることにも留意すべきである。血液系疾患の具体例を提示する。

3, 症例

症例：T. I. 65歳 男 168cm 71Kg 初診：2005-9-17 No.05-3106

主訴：微熱(朝 36℃代、夕方 37℃代)、夕方に眩暈、発汗過多

現病歴：2004年11月検診で血液異常(RBC312万, Hb9.3, WBC6100, Plt44.1)を指摘された。2005年5月よりLDH243に上昇。8月中旬より微熱、鼻閉。9月9日某大学にて骨髓異形成症候群の診断。骨髓穿刺の結果で染色体異常なしとのことで、抗ガン剤治療は見送り。2週間毎に輸血を施行している。

西医診断：骨髓異形成症候群 (MDS, 前白血病)

既往歴：1975年左足首複雑骨折、以後慢性骨髓炎(約15年間)

現症：最近まで毎晩ビール1/2本。2年前まで煙草40本(毎日)。緑茶を飲む。若年より大便秘は毎日3-4回(後軟)。

飲食に関しては、身体を冷やすビール、緑茶を禁止、紅茶やほうじ茶にするよう指導。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	細滑 按微	弦細 按微	沈細滑
右	細滑 按細	滑細弦 按細	沈細滑、長

舌診：舌質暗、舌苔黄薄膩、舌裏静脈の怒張有り

指甲診：左4本(淡大)、右5本(淡大) 第1-4指に黒線有り

腹診：胸脇苦満右にあり。

辨証：陰陽両虚、気滞湿蘊、血瘀毒盛

治法：利気去湿、解毒温陽

処方：(1) 前胡 15g、醋黄芩 7.5g、半夏 6g、乾生姜 3g、枳殼 3g、土炒白朮 9g、牡蛎 15g、天花粉 6g、淫羊藿 9g、白花蛇舌草 20g、徐長卿 20g、赤石脂 9g、鷄内金 6g、靈芝 9g、炒甘草 6g (原料5日分を細末化して8日分とする) 3x7T

(2) 刺五加末 3g 2x7T

【処方解説】柴胡桂枝乾姜湯の加減といえる。唐代の『千金方』などの医書には小前胡湯、大前胡湯など『傷寒論』の小柴胡・大柴胡湯とほぼ同じ方意を持つ処方が記されている。柴胡は本来胃腸薬であり、より清熱効果を期待したい場合は、前胡を用いることにしている。ここでは初めての漢方煎薬服用ということ意識して、規定の2/3の薬量から始め、しかも薬代を押さえるため、細末化し抽出効率を高め少ない日数で対応している。

以後、薬量は1.5倍に増やし、毎回処方内容変更し経過観察した。

2006年5月6日受診。5月1日のデータ。CRP0.1, Plt6.3, WBC2400, Hb7.8

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	滑やや弦	沈細
右	滑	滑やや弦	沈滑細

舌診：舌質淡暗、舌苔白薄膩、舌裏静脈の怒張有り

処方：(1) 人參 9g、葛根 15g、干地黄 15g、製首烏 9g、女貞子 15g、旱蓮草 9g、桂皮 4.5g、

杜仲 9g、修治附子 3g、烏頭 2g、白花蛇舌草 30g、石葦 30g、靈芝 9g、焦山査 12g、
炒甘草 6g (原料 8 日分を細末化して 12 日分とする) 3x12T

(2) 全虫炭 1.5g、蛭桂散 1g、刺五加末 3g、縮尿散 2g 2x12T

5 月 16 日 (FAX) Plt2.5, CRP2.1 で抗生物質処方された。服用不要と指示。

5 月 20 日 左足首の骨髄炎による痛み増強。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細 按微	滑細	沈細滑
右	滑 按微	滑 按細	滑細

舌診：舌質正、舌苔白膩、舌裏静脈の怒張無し

処方：(1) 桂皮 4.5g、赤芍 12g、知母 6g、白朮 15g、麻黄 3g、修治附子 3g、烏頭 1g、当帰 15g、
川芎 9g、鶏血藤 20g、鶏屎藤 20g、常春藤 20g、干地黄 15g、焦山査 12g、靈芝 9g、
炒甘草 6g (原料 10 日分を細末化して 14 日分とする) 3x14T

(2) 刺五加末 3g、縮尿散 2g 2x14T

【処方解説】桂芍知母湯加減であるが、近代湖南の名医劉炳凡老師の鶏血藤＋鶏屎藤＋常春藤からなる三藤湯の方意が重要である。これは瘀血と風寒湿の絡む疼痛疾患に非常に有用である。

5 月 23 日 (電話) 足首痛消失。昨晚 38℃、体冷罨法のみで解熱。また抗生物質処方されたが、服用不要と指示。CRP0.2, WBC1800, Plt2.4

5 月 24 日 (電話) 昨日輸血と輸液した。夜 38.5℃、朝昼 38℃。前方中断して新処方を服用の指示。

方：小前胡湯加減

処方：前胡 12g、炒黄芩 9g、人參 9g、半夏 9g、乾生姜 6g、石膏 12g、白花蛇舌草 30g、
半枝蓮 30g、靈芝 9g、焦山査 12g、大棗 6g、炒甘草 4.5g (細末化無し) 3x7T

5 月 27 日 (電話) 25 日夕方には解熱。現在 37℃。尿が褐色で泡立つ。

5 月 31 日、現在 38.3℃、咽頭痛、尿清。腰痛。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	滑細 按微	沈細滑
右	滑有力 按微	滑細 按微	沈細 (滑)

舌診：舌質やや暗、舌苔白満布、舌裏静脈の怒張あり

方：柴胡桂枝乾姜湯加減

処方：柴胡 12g、炒黄芩 9g、桂皮 4.5g、半夏 9g、乾生姜 6g、枳殼 6g、蒼朮 9g、牡蛎 20g、
天花粉 9g、桔梗 9g、修治附子 3g、薏苡仁 20g、白花蛇舌草 30g、石見穿 30g、炒甘草 6g
3x7T

6 月 7 日 5 日咽頭痛 37℃、6 日 38.5℃、聖・桂枝湯服用指示。今朝 36.5℃。

昨日 RBC, WBC, PLT の成分輸血、更にステロイド注射。

処方：(1) 前胡 12g、炒黄芩 9g、人參 9g、桂皮 4.5g、干地黄 15g、製首烏 12g、修治附子 4.5g、
猪苓 15g、滑石 18g、山帰来 30g、萆薢 9g、白花蛇舌草 30g、石葦 30g、靈芝 9g、
土別甲 12g、炒甘草 6g 2x9T

(2) 雲南白朮 2g 2x9T

6月16日 6月11日朝、咽頭痛 37.2℃。13日に頬粘膜を噛み腫痛。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	細滑 按微	滑細弦 按細	沈細滑
右	滑 按微	滑 按細	沈細滑

舌診：舌質暗、舌苔白満布、舌裏静脈の怒張有り

(1) 柴胡 12g、醋黄芩 9g、人参 9g、枳実 6g、蒼・白朮 (各) 9g、麻黄 4.5g、修治附子 3g、
烏頭 1g、干地黄 15g、靈芝 9g、鶏内金 6g、白花蛇舌草 30g、石葦 30g、石見穿 30g、
炒甘草 6g 2x8T

(2) 雲南白朮 2g 2x8T

(3) 白喉吹散 20g (屯用)

【処方解説】 暫く続いていた体調の悪さを、脈が全体に重按すると細微であることに留意すれば、この段階で次回の症状の悪化を防げたはずである。たとえばこの小柴胡湯加減の人参の薬量をもっと増やしておくとかである。

6月23日 体動時に動悸、息切れ。紫斑、口腔内は回復。

	Hb	RBC	WBC	Plt
'06-06-19	5.4	181	900	0.9
脈診	寸脈	関脈	尺脈	
左	細滑 按細	滑	沈細滑	
右	滑 按微	滑 按細	沈細滑	

舌診：舌質暗、舌苔白満布、舌裏の静脈の怒張有り、

処方：(1) 人参 20g、干・熟地黄 (各) 20g、麦門冬 15g、五味子 6g、丹参 24g、修治附子 3g、
烏頭 1g、茯苓 15g、白朮 15g、白花蛇舌草 30g、石見穿 30g、靈芝 9g、縮砂 4.5g、
炒甘草 3g 3x9T

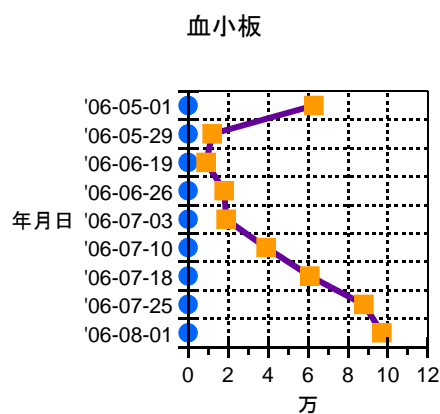
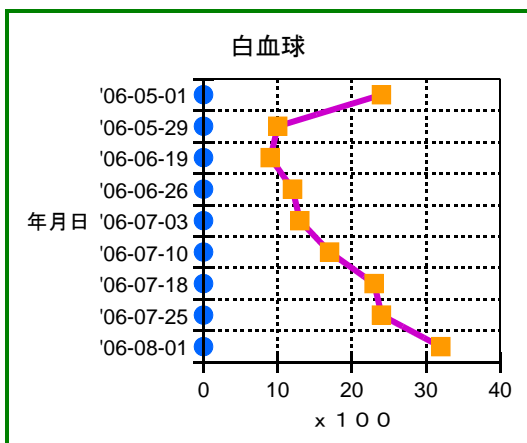
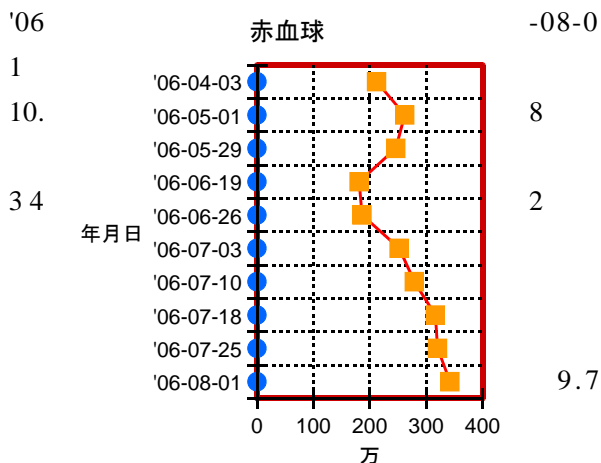
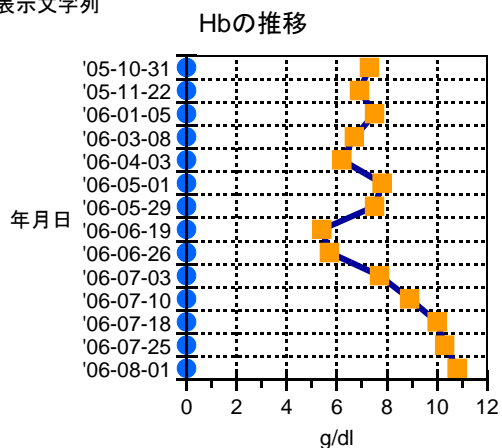
(2) 雲南白朮 3g 2x9T

【処方解説】 左寸脈は重按細であり、明らかに心の気血不足が窺われる。その根本は右関脈の重按細から分かる脾胃の気虚にある。また腎は陰陽共に虚衰状態であり、血液データからも危機的状況が考えられ、胃気を一気に回復させ、併せて補腎を行う必要があった。多量の人参や地黄、併せて丹参を用いた。直接的には動悸など強心を目的とする生脈飲の方意も含まれている。

	Hb	RBC	WBC	Plt
'04-11-29	9.3			
'05-10-31	7.3			
'05-11-22	6.9	259		
'06-01-05	7.5			
'06-03-08	6.7			
'06-04-03	6.2	212	11600	23.0
'06-05-01	7.8	262	2400	6.3
'06-05-29	7.5	246	1000	1.2
'06-06-19	5.4	181	900	0.9

'06-06-26	5.7	186	1200	1.8
'06-07-03	7.7	252	1300	1.9
'06-07-10	8.9	279	1700	3.9
'06-07-18	10.0	316	2300	6.1
'06-07-25	10.3	320	2400	8.8

表示文字列



血液データのグラフから解るように、本処方をつけかけとして急速に回復にいたり、その後は輸血も行わなくなった。これは回復傾向に好ましい結果をもたらす一つの要因であろう。

その後は人参の用量も 9 g で推移していたが、最新の診察時に再び右関脈(脾胃の脈)に重按微が見られたため、前回の轍を踏まないよう予防的意味を含め再び人参などの用量を増加させた。

9月26日 本日血検、WBC2200,Plt15.1、微熱 36.4℃、血圧 150代/85 前後

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	滑細弦	沈細滑、長
右	滑	滑 按微	沈滑細、長

舌診：舌質淡暗、舌苔白薄膩、舌裏静脈の怒張あり

処方：(1)磁石 15g、牡蛎 20g、干・熟地黄(各)15g、人参 15g、茯苓 15g、修治附子 3g、
烏頭 1.5g、縮砂 15g、龜版 12g、丹參 15g、五味子 6g、白花蛇舌草 30g、石見穿 30g、
炒甘草 6g 2x12T

(2)雲南白朮 2g、刺五加末 3g 2x12T

今後も状態の推移を四診を通して的確に観察し、後手に回らないように対処していく所存である。

4、総括

従来、ガン治療に於いて漢方治療は、免疫賦活の名目のもとに気・血・津液の量を増やすことが専一にされてきた。しかしガン自体が直接には気・血・津液の流れの停滞によって作られるものであることを考慮すれば、そこには治療の順番として大きな問題が存する。先ずガン治療を始めるに当たり配慮すべきは、特に気の流れを改善させることである。その後、痰飲・瘀血などに配慮しつつ、次第に気・血・津液の量を増やすべきであり、基本的に診察ごとに処方内容は変更し対処する。つまり「先標後本」の治療原則に沿って治療することを忘れてはならない。また十分な治療効果を出すためには薬量への配慮も必要な場合がある事も認識しておくべきである。

初回治療時に主病巣や所属リンパ節の切除ができ、取り敢えず肉眼的な拡散が否定される状況であれば、術後に化学療法や放射線治療を行うことなく、当院の加療のみで9割以上長期緩解の治療実績がある。化学療法などはガン細胞の悪性度を高め、しかも免疫力を低下させるので、その療法にはより一層の慎重性が求められるが、現実には併用を希望されることが多い。その場合でも漢方治療を行うことで、化療の効果を増強すること、さらには化療による副作用を軽減することに役立つといえる。

既に遠隔転移が見られる場合でも、漢方治療により腫瘍マーカーや画像上の改善が見られることもあり、Q.O.L.の改善を含め、延命効果は十分期待できる。そのさい上記した原発巣の切除の有無は予後に大きな影響を持つ。確認されたことではないが、癌塊の中で最も悪性度が高いのは、幼弱性を維持したまま分裂増殖を繰り返す「ガン幹細胞」の存在である。このガン幹細胞が原発巣に最も多いことは十分に考えられ、その切除の意義は大きい。

ガン患者を治療するに際し最も重要なことは、患者や家族に改善・緩解の期待を抱いて貰うことであり、そのためにより具体的な日常生活の養生法を教示し、闘病の意欲を高めることである。努力目標は冷飲食の禁止と上手な気晴らしに尽きる。奇しくもこの両者はガンが存在するときに人体が発する警鐘に敏感な身体を作る上でも必要である。